
銀の放浪老人

脳好き人間

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀の放浪老人

【Nコード】

N8090X

【作者名】

脳好き人間

【あらすじ】

一人の老人が、世界のため、自分の快適な生活のため、可愛い孫を手に入れるために、世界を放浪する物語。

ほぼ会話オンリー、ほぼ毎朝更新、ほぼほのぼのファンタジー、の
ほぼ三つを目標に掲げています。ついでに言つと、ほぼ思いつきで
書いています。クオリティーには自信がありませんが、暇なときの
暇潰しにでも読んでもらえると嬉しいです。

プロローグ

「千、いや、千五百くらいですかねえ」

一人の老人が呟いた。

「そろそろ対処しないとバランスが崩れてしまいそうですね。久しぶりに、旅立つとしますか。ええ、まずは服装ですね、いかにも紳士っぽい感じでいきましょう」

そう言うと、老人は黒いスーツを着て、頭にはシルクハットを、顔にはモノクルを被り、ステッキを持った。

「うーむ、これぞ紳士って感じですねえ。名前は、銀次、でいいでしょう。銀は老人の象徴ですからね。ではギルドでの名は、シルバ、にしましょう」

老人は、適当に名前とギルドでの名を考えると、満足気に頷いた。

この世界では、ほとんどの住人が名前を二つ持っている。一つは親から名付けられる名で、もう一つが自分の職業を決めるときにギルドで登録する名だ。

必ずギルドに登録しないといけないわけではないが、ギルドから発

行されるギルドカードは現代でいうキャッシュカードやクレジットカードの働きをしてくれるので、ほとんどのヒトはギルドに登録している。

ギルドカードがないと、いちいちお金を持ち歩かなければならないため、世界を身一つで放浪する予定の老人には絶対に必要なことだ。

「世界はずいぶん便利になりましたね。私が若い頃はギルドなんて無かったのに。誰が考え出したのでしょうか？」

「まあ、とにかくにも、まずはギルドに向かわなくては」

こうして、銀の放浪老人の旅が始まった。

プロローグ（後書き）

登場人物紹介

銀次（約二百五十歳、人間族）

黒いスーツ、シルクハット、銀のステッキ、モノクルという出で立ちで、本人はこれが紳士の正装だと思っている。
今一番欲しいものは『世界の平和』と『孫』。

殺人鬼との邂逅（前書き）

ほのぼの？

会話オンリー？

……あれ？

殺人鬼との邂逅

「名は、シルバ、ですね。職業は何ですか？」

「職業、ですか？」

ギルドの従業員に尋ねられ、老人は困ってしまつた。

「特にこれといったものが無ければ、適当でいいんですよ。例えば、冒険者、とか？」

老人の様子を見兼ねた従業員は、助け船を出した。

「冒険者！素晴らしい！それに決めます！」

「え、はい。わかりました」

従業員は突然の老人の豹変ぶりに驚きながらも、冷静に対応した。そこは流石プロ、といったところだ。

「はい、手続きは終了しました。こちらがシルバさんのギルドカードです。御受け取り下さい」

「ふむふむ、早いですね、しかし冒険者、ですか。思ってたより俄然やる気が出てきました！」

鼻歌を歌いながら、老人は壁に貼ってある賞金首の手配書を見て、ギルドから去っていった。

「やっぱり殺人鬼ですか。殺人鬼が増えすぎると二百年前みたいになっちゃいますからね。可哀相ですが仕方がありません」

老人は人気の無い森の中で呟いた。

「この近くのはずなんですけど、見つかりませんね。もしもし、殺人鬼さん。いるなら出てきてください。出てきたら飴ちゃんあげますよ」

「なに、それは出てくるしかねえじゃないか」

「ふむ、本当に出てきてくださいましたか。飴ちゃんをどうぞ」

「おう、ありがとな」

バキッ

男は飴を受け取りながら、老人の首にナイフを突き刺した。いや、突き刺したつもりだった。

「な、ナイフが、折れた？」

「今のは、殺そうとしたのですか？それとも、最近流行りの挨拶ですか？」

「殺そうと思ってやったんだよ。今日はまだ誰も殺してないからな。一日一殺が俺のポリシーなんだよ。」

「すみませんが、一週一殺くらいに減らせませんか？煙草の減煙みたいな感じで」

「そんなこと、出来るわけねえだろ！」

叫びながら、男は隠していたナイフを老人に投げ付けた。

「おっとっと、危ない危ない」

老人は持っていたステッキでナイフを弾き、そのまま男の首に突き刺した。

「減煙、いや減殺してくださいなら殺処分するしかないですが、それでも駄目なんですか？」

「一日一殺しねえと、すげえ苦しいんだよ。お前ら人間にはわからねえだろうがな！」

一瞬で首から下が再生した男は、先程弾かれたナイフを拾おうと駆け出した。

だがその努力も虚しく、ステッキで体をバラバラに分解される。いや、分解され続ける。

「はい、最後の一つですよ」

「何が、だ？」

「あなたの命のストックが、ですよ。思ったよりも殺してはいなかったようですね。最近まで殺しを我慢してたのですか？」

「最近までは、な。そのせいで、恋人を殺しちゃったんだ」

「それは可哀相に。今からでも減殺してくださいさるのなら、見逃してあげますよ。殺しを我慢したことのある殺人鬼というものは、珍しいですし」

「いや、もういいんだ。どうせ生きていたって殺しつづけるだけだ

しな。そのステキなステッキで殺してくれよ」

「了解しました。そのステキな駄洒落に敬意を表し、あなたを始末して得た賞金の半分くらいでステキな墓でも建ててあげましょう」

「それはそれはどーも」

老人は苦笑いを浮かべる男の頭にステッキを振り下ろした。

「それにしても、殺しを我慢する殺人鬼、ですか。黒矢少年のことを思い出しますね。彼は今でも正気を保っているのでしょうか？ 気になります、行ってみましょう。お金も手に入りましたし」

殺人鬼との邂逅（後書き）

登場人物紹介

男（二十歳、殺人鬼族）

ヒトを殺さなければ生きていけないはずの殺人鬼には珍しく、最近まで殺しを我慢していた頑張り者。

色々苦しんだりしてたけど、ステキなステッキで殺され、ステキな墓を建てられた。

好きな食べ物ステーキ。

鬼の料理人（前書き）

知り合いが、この世の終わりがきたみたいな表情で言っていました。
「プリンに、プリン体は含まれていない」

あの言葉には、どんな意味が隠されていたのでしょうか？

鬼の料理人

「気配的に、黒矢少年はこの店の中にいると思うのですが、『科学食堂』ですか。なんだかあまり入りたくない店名ですね」

「いらつしやいませ。あれ、もしかして御大老様ですか？」

「はい。大体二百年ぶりですね。しかし、今はその名で呼ばないでください」

「え、じゃあ、なんと呼べばいいんですか？」

「白銀の旅人、ステッキマスター銀次、とお呼び下さい」

「白銀の旅人、ステッキマスター銀次さん、本日はどのような御用件で？」

「本当に呼ぶとは驚きですね。ただ、黒矢君があの時言つてた約束を守れているか、確かめてみようと思っただけです。まあ、大丈夫そうなので安心しましたよ」

「『正当防衛』以外でヒトを殺さない。ですね。最初の方はきつかったですけど、今はもう大丈夫ですよ。相棒も出来ましたしね」

「相棒とは、奥で何やら怪しい物質を作っている方のことですか？」

「いや、本人いわく、料理ですよ。科学と料理には深い関わりがあるそうです」

「しかし、吸血鬼が料理（？）とは珍しい。それに、かなりの力を感じます。あの方は一体何者なんですか？」

「ただの変人ですよ。変態でもありますが」

「私は変人でも変態でもない。天才だ！」

「うわっ！」

「おつと危ない。大丈夫ですか、黒矢君？」

「大丈夫ですよお爺さん。気絶しているだけ。あつ、さすらいのステッキ職人銀次さんでしたっけ？」

「全然違いますよ。それにしても、黒矢君が気絶するなんて。貴女は一体何者なんですか？」

「ええと、ギルドでの名は、リイレです。ああ、黒矢の知り合いなら名前を覚えておかないといけませんね。吸血鬼の伶俐です」

「伶俐さん、ですか。もしかしてラッドさんの娘さんでは？」

「父を知っているんですか？」

「はい。二百年前の戦争でラッドさんに命を救われたことがあります」

「あのダメ父も誰かの役にたったりしてたんですね。でもステッキ職人さんはどう見ても人間ですよ。失礼します」

「痛い！何をするのですか！」

「いえ、貴重なサンプルとして血液を採取させていただきました。銀次さんの皮膚は並のヒトとは比べ物にならない硬さでしたが、流石はあの武器職人さんの作った注射器ですね」

「なんで吸血鬼が注射器を使うんですか！」

「だって汚いし…」

「そんな！これは、堪えますね」

「うーん、血を見る限り、異常な点は見つかりませんね、って、なっ、泣いている！」

「う、泣いて、なんか、いま、せん。私は、旅人、ですし」

「マジ泣き！ちょっと、黒矢！起きてよ！この状況をなんとかしてよ！」

「う、うん？」

「し、紳士、たるもの、レディ、には、暴力、ふるえま、せんが、君、なら命、ストック、万単位、ありますしね」

ガギッ

「ぐわっ！」

「黒矢！大丈夫？」

「フツ、このナイフが、俺の命を守ってくれたようだぜっ。って、壊れてる！」

「ふむ、命を一つ減らすことも出来ませんでしたね。それにしても、今の攻撃が避けられなかったとは」

「ステッキ職人さん、黒矢は最近一人も殺してないから、ずっと苦しんで気絶寸前なんですよ。そんな黒矢に暴力なんてヒドイッ！」

「なるほど、気絶寸前の苦しみですか。大した精神力です」

「白銀の旅人、ステッキマスター銀次さん、俺の大切なナイフをどっとうしてくれるんですか？」

「それに、さっきまでの嘘泣きなんですか？私を騙すなんて」

「ナイフは弁償しますよ。あと、さっきまでの嘘泣きです。貴方達を油断させるためでした」

「へー、ちなみにさっきのナイフは『刹那を生きる』で買った物ですよ」

「え、そうなのか？」

「黒矢は黙ってて！」

バキッ！

「それに、さっき黒矢がステッキ職人さんのステッキで突き飛ばされた時に、私のビーカーとスポイトが壊れてしまいました。それも弁償して下さい」

「それは嘘で」

「私を疑うなんて酷い！泣きそうです！」

「……………分かりました。全部あの店で買ってきます」

「ありがとうございます。流石はステッキ職人さん」

「…はあ」

「あの娘さん、いい性格してますね。まあ、あれくらいじゃないと黒矢君の相棒なんて務まりませんよね。それに、あの時本気で泣いてしまったこともバレずに済みましたし。結果オーライ、でしょ」

鬼の料理人（後書き）

登場人物紹介

黒矢（約二百歳、殺人鬼族）

二百年前の戦争のとき、銀次と正当防衛以外でヒトを殺さない約束して、今だに約束を守っている真面目なヒト。色々あって伶俐と出会い、行動を共にしている。ヒトを殺していないため、常に苦しみに耐えている。そのせいですぐ気絶するし、足元がおぼつかないからよくこける。常連客からはドジすぎる可哀相なやつだと思われる。

伶俐（約二百五十歳、吸血鬼族）

黒矢と行動を共にしているマッドサイエンティスト。実験と研究が一番の楽しみで、興味があるものを見つけると我を忘れてしまう。科学と化学と料理を同じものだと考えている。生涯をかけて叶えたい野望があるらしい。実はかなりの箱入り娘で、黒矢に教えてもらうまで、吸血鬼なのに血の吸い方を知らなくて、血は常に用意されている飲み物だと思っていた。

刹那を生きる！（前書き）

ああ、あの二人を登場させてしまった………

刹那を生きる！

「はあ、ここにはもう来ることはないと思っていましたが、仕方がありませんね。それにしても武器屋の名が『刹那を生きる』だなんて、趣味悪いですね」

キインツキインツ

「おっと、危ないです。そーいえばこの店員さんは店名以上におかしなヒト達でしたね」

「僕達」

「私達の」

「鉄製紙飛行機を」

「避けるとは」

「お前、ただ」

「者じゃあ」

「無いな」

「それに、私のネーミングセンスを馬鹿にしゃがって。許さねえ。なっ、優平」

「いや、正直俺もあのネーミングセンスはどうかと思ってた」

「あの、すみません。武器を買いに来たんですけど」

「なんだって、じゃ」

「あ、あれだな。」

「いらっしや」

「いませー」

「二百年経ってもその喋り方は変わりませんね。ずっとそうなので
すか？」

「いや、二人だけの時は普通に話しますけど、なあ、刹那？」

「まあね。つーか、あんな喋り方で一日中話してたら疲れちゃうよ。
てゆーかあ」

「あなたは誰で」

「したっけ？」

「いえ、以前素敵なステッキを購入した者です」

「あ、私このヒト覚えてる。駄洒落センスが絶望的なヒトだ！」

「なるほど。思い出した。俺達のこと、『あくまで悪魔なんですな、

でも飽くわ』とか意味不明な言葉を口走ってました」

「あの一、そのことは忘れて下さい。といつかまさか二百年も覚えてるなんて」

「まあ、僕は悪魔だし」

「しだまくあはしたわ、あま」

「この世界はほとんどの種族がヒトって言われてるのに、僕達悪魔だけが魔族とか言われてるし」

「全く酷いよね。私達以外の全ての悪魔がヒトを滅ぼそうとしているといえど、これは明らかに人種差別だわ！」

「あの一、武器を」

「うるさいな、」

「黙ってなよ老人」

「あんに必要な物なら」

「レジのところを置い」

「てあるよ、あんたは」

「人間の中では最強っ」

「ぼいし、特別大サービ」

「スしてやんよ。それに」

「死なねー奴と取引して」

「も意味ねーし、私は若い」

「魂が好みだしな」

「では、頂いておきますけど、やっぱり貴方達は魂とか食べるのですか？」

「超食べますよ。それはそれはこの星の住人の半分くらいは」

「なんですと！」

「いやいやジョークだったの。あたいらは温泉饅頭とか食って生きてるよ」

「魂とか汚そうだし」

「じゃ、元気だな」

「白銀の旅人、ステッキマスター銀次さん」

「素敵ステッキ職人さん」

「はい。それではまた、優平さん、刹那さん」

「いやはや、三十年分くらい疲れが一気に溜まりました。もうここには来たくないです。しかし、私、いや、儂、やつぱ、私が買うおとしていた物が既に揃えられているとは、悪魔とは本当に恐ろしい生き物ですね。まあ、あの二人が特別なだけかもしれないが」

刹那を生きる！（後書き）

登場人物紹介

刹那（年齢不明、悪魔族）

優平とともに武器職人をやっている。ネーミングセンスは絶望的。ヒトと仲良く（？）するため他の悪魔から敵視されているが、魔族の王の弱みを握っているため、魔族で刹那に逆らえる者は優平しかない。ブラックジョークを愛している。

空霧優平（年齢不明、悪魔族）

刹那と行動を共にしている武器職人。名前の通り優しい（？）性格をしており、気が向いたときは、客を殺そうとする刹那を宥めたりする。刹那のことを大切に思っているが、ネーミングセンスの悪さにはうんざりしている。

マッドサイエンティストって響きはカッコイイっすね

「買ってきましたよ。ナイフとビールカーとスポイト」

「あ、生きて帰ってきたんだ。ステキステッキさん」

「白銀の旅人、ステッキマスター銀次さん、無事でしたか」

「ええ、かなり疲れましたが。取り合えず、約束の品です」

「伶俐の分まで買ってきてくださったんですね。あいつが言ったことはうそな」

バキッ

「とにかく素敵ステッキジーさん、ありがとう。あの店の製品なら溶ける心配もないし」

「溶ける？ええと、貴女は料理をしようとしているのですよね？」

「そうですねど何か？」

「いえ、私、いや、我、いや、私には意見はありません」

「その喋り方、さてはまだ一人称を決めてませんね。そんなあなたにこれ、『一人称決まるそば』今命名」

「いつの間に作ったんですか！というよりその料理、食べれる物な
んですか？」

「もちろん、さあさあ遠慮せずに」

「いえ、慎んで辞退、ぐわっ、あぐっ、ぐえっ、ごくくん」

「あーあ、飲み込んだじゃった」

「……………」

「あー、大丈夫？」

「ふむ、大丈夫ですよ。これしきのことでは我輩に異常がでることは
ありません。しかし貴女、レディが暴力を振るうものではありません
。余は悲しいです」

「我輩に余、か。ふむふむ。そういえば黒矢に食べさせた時もこん
な感じだったような。完成品にはまだまだ遠いような」

「黒矢君にも食べさせたのですか、可哀相に。もしかして、黒矢君
がすぐ気絶する理由の一つに、貴女の料理を普段から食べているこ
とが挙げられるのでは？」

「……………いえ、そんなことはありませんよ？」

「はあ、黒矢君も大変そうですね。しかし、殺人鬼の相棒など、貴
女のような良い意味でも悪い意味でも意志や意思が強い方でなけれ
ば務まりませんね」

「どづいづことですか？」

「要するに、これからも黒矢君の面倒をみてあげてください、という事です」

「うーん、面倒をみてもらってるのは私の方だと思いますけど」

「それでも貴女は黒矢君の支えになっているはずです。黒矢君の貴女を見るときの目を見ればわかりますよ」

「えっ、どんな感じなんですか？」

「僕の口からは言えません」

「そんなっ、教えてくださいよ。正直、最近変な料理とか食べさせ過ぎだなんて自覚はあって、内心黒矢に嫌われてないか不安に思い始めているんですよ」

「そんなに不安に思うのなら、変な料理なんて作らなければいいのでは？」

「それは出来ません。私には絶対にやらなければならぬことがあります。そのためにはたくさんの実験データが必要なんです」

「やらなければならぬこと、か。殺人鬼が殺しをしなかった場合に伴う苦しみを消すこと、ですね？」

「何故それを？」

「伊達に長生きしていません。まあ、難しいことでしょうが頑張っ

てくださいね、伶俐さん。それに、そこまで自分のために頑張ってくれる子がいて羨ましいです、気絶したふりをしてる黒矢君」

「えっ！聞いてたの！黒矢！」

「ギクツ、いや、そんなこと、ないよ？」

「さっ、さっきのは冗談だからね！私が研究するのは、あくまで私自身の趣味！勘違いしないでよねっ！」

「ほほえましい光景です。しかし、ツンデレという言葉が流行ってから、勘違いするな、等のセリフのかつこよさが微塵もなくなってしまうました。一体いつの間にか変わってしまったのでしょうか？」

マッドサイエンティストって響きはカッコイイっすね(後書き)

勘違いすんじゃないねえ

とか、僕が小さい頃見てた漫画なんかで言ってるキャラがいた気がするけど、あれも「ツンデレ」ってカテゴライズされると格好悪くなりますね。

ちつとばかり嫉妬しちゃったよ（前書き）

十一月六日は、お見合い記念日、又はアパート記念日です。

特に意味はありませんが。

ちつとばかり嫉妬しちゃったよ

「はあー。優平くんには刹那さん、黒矢君には伶俐さんという相方がいますが、余には相方がいません。我にも相方が欲しいですね。どこかに僕のことを「おじいちゃん」と呼んでくれる可愛い孫はいませんか？」

「その怪しいヒト、こんな森の中で何してんの？」

「「おじいちゃん」と呼んでくれる可愛い孫はいませんか？」

「……………」

「「おじいちゃん」と

「お、おじいちゃん、こんな所で何してるの？」

「孫を探しているのですよ」

「孫、ですか。でも、少なくともこんな森の中にはいないと思いますよ」

「そんなことはありませんよ。貴女のような可愛らしい女の子に会えましたし」

「いやー、照れますね。褒めても何にも出ませんよ」

「うーむ、一つ頼みを聞いてもらえませんか？」

「頼み？ああ、森の出口へ案内してほしいとか？」

「いえ、単刀直入に言いますと、私の孫になつていただけませんか
！！」

「……………」

「孫に、なつていただけませんか？」

「……………」

「孫に、なつてほしいぜよ！」

「……………」

「孫に、なつてくれないかな？」

「……………嫌です」

「何故、何故断るのですか！」

「知らないヒトについていくなど親から厳しく言われておりますの
で」

「さつきはおじいちゃん、と呼んでくださったのに！」

「それは話を進めるために仕方なく、でした」

「そんなっ、こんな老人の心を弄ぶなんて、ヒドイッ！」

「このヒトと話すの疲れる。あのっ、森の出口はあちらですよ。早く出て行ってください！」

「は？ここはあの有名な『帰らずの森』ですよ。不老系の種族が自らの命を絶つために訪れるという。どうして貴女は帰り道を知っているのですか？」

「そ、それは……………」

「それは、この森の主である死神族だから。おかしいですね？死神族はあの戦争で滅びたはずなのに」

「何故それを？」

「おじいちゃんは物知りじいちゃんですから。なるほど、最初に私に話しかけたのは、私が自殺志願者かどうかを調べるためなんですね？」

「はい。死神族の役目は、自殺志願者の不老不死系の種族の方達の命を刈ることですから。あなたのような変人は管轄外です」

「一族がみんななくなっただけから、その仕事を続けてたんですね。仕事内容も辛い内容でしたでしょうに」

「辛くても、それが仕事ですから」

「辛いなら、やめてしまえ。私の孫になれば、飴ちゃんだってあげますよ」

「 飴ちゃん。ですか」

「 飴ちゃん。ですよ」

「 しかし、一族の遺志を守るためにも……………」

「 飴ちゃん。ですよ」

「 今までだって頑張ってきたし……………」

「 飴ちゃん。ですよ」

「 …………… 飴ちゃん」

「 飴ちゃんーん」

「 飴ちゃん」

「 飴ちゃんどうぞ」

「 いただきます」

「 ……………」

「 …………… パクッ」

「 ……………」

「 …………… しまったー！」

「あーあ、食べちゃった」

「そんなっ！ 飴ちゃんて釣るなんてっ！ なんてヒトだ！」

「おじいちゃんと呼びなさい」

「……………おじいちゃん」

「大きな声で！」

「おじいちゃん！」

「よし。後は、貴女の呼び名ですね。なんとお呼びすればよろしいでしょうか？」

「ええと、名前忘れしました。二百年も名前呼ばれてないし、仕方ないですね」

「じゃあ、我輩が命名しましょう。『おじいちゃんラブ子』は？」

「却下します」

「『じつちゃん好子』」

「却下」

「『グラントフマザ子』」

「死んでください」

「『真子』」

「まこ?」

「気に入りました?」

「……………孫だから真子ですか?」

「ギクツ、いや、そんなこと、ない、ですよ?」

「却下」

「ふむ、却下ですか。うん?そっだ、『却花』は?

「きゃっか?」

「なんか、花ってついてたら可愛いっぽくないでしょうか?」

「……………却下。いや、却花でいいです」

「じゃあ、改めまして。よろしく、却花ちゃん」

「いちらこそ、お、おじい、ちゃん」

「>>>>」

「おじいちゃん?」

「いや、いいものですね、孫というものは。生きててよかった」

「大袈裟です」

「まあ、出発するところまじょー」

「はい！」

ちつとばかり嫉妬しちゃったよ（後書き）

登場人物紹介

却花（約三百歳、死神族）

千歳からが大人である死神族の中では、まだまだ子供だったため、二百年前の戦争のとき、森の奥に隠され、生き残った。それからずっと死神族の仕事を一人でこなしていたが、銀次に飴で釣られ、孫にされてしまった。孫と言いつつ、実は銀次より年上。

男が自慢話をしている時、脳内でドーパミン…（中略）…温かい目で見守ってき

男は自慢話をしているとき、脳ではドーパミンが分泌されているので、自分の意思では中々止められませんが。お酒の席などで自慢話をされても、暖かく見守ってあげましょう。

男が自慢話をしている時、脳内でドーパミン…（中略）…温かい目で見守ってき

「ちょっとちょっと、黒矢君、伶俐さん、聞いてくださいよ!」

「白銀の旅人さん、一体どうしたのですか?」

「あれ、伶俐さんは?」

「今実験中なんで地下に籠ってます」

「はあ、残念です。伶俐さんにも僕の可愛い孫を見せてもらいたかったのですが」

「可愛い孫?ああ、その死神の子ですか?」

「はい。可愛いでしょう。却花って名前です」

「……………却花です。よろしくお願いします」

「死神の生き残りか。……………あつ!ヤバイツ!伶俐が来る!逃げるんだ却花ちゃん!」

「それは何故ですか?」

「それはっ!いや、もう遅い」

「……………遅い?」

「し、に、が、み、ぞ、く。血液、採取、ヒヒヒ」

「ひゃあっ！やめてください」

「こんなところに死神族がいるなんて。良いデータがとれそうね。ジュルツ、おっと、よだれが」

「ちょっと！黒矢さん！おじいちゃん！助けて！」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「あの一、黒矢君」

「な、なんですか？」

「私の可愛い孫は大丈夫なんですか？」

「……………」

「大丈夫なんですか？」

「ええ、大丈夫だと思いますよ。多分血とかを結構採取されるくらいで解放されると思います」

「それって、大丈夫の内に入りますか？」

「た、多分」

「どうして却花さんは連れていかれたのですか？」

「死神族だからでしょう。怜悯は珍しい種族を見つけると、血を採取せずにいられない性格をしていますから」

「血を採りすぎたりはしませんよね？」

「ええ、百年前くらいだったらヤバかったですけど、今なら大丈夫です」

「百年前？」

「……俺の命のストックが二つ減るまで血を吸われました」

「……」

「いやー、流石にあのときは死ぬと思いましたよー。ははははは」

「……」

「つつても、二回も死んだんですけどね。ははは」

「……」

「……」

「……先に謝っておきます。ごめんなさい」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「それにしても、帰ってくるのが遅いですね？」

「……………」

「……………」

「本当にごめんなさい！」

「……………」

「本当にすみません！」

「……………」
貴方は謝らなくてもいいです。僕の可愛い孫、却花ちゃん
は、貴方に殺されたわけではなく、伶俐さんに殺されたのですから。
責任は伶俐さんにとってもらいます。」

「……………」

「……………」

「……………」

]

男が自慢話をしている時、脳内でドーパミン…（中略）…温かい目で見守ってき

命とは、儚いものです。大切にしましょう。

先入観ってのを完全に捨てられる人って、実際にはいませんよね（前書き）

泣くということは、ストレス解消として、かなり効率が良いらしいです。

ストレスが溜まっている人は、泣きまくりましょう。

先入観つてのを完全に捨てられる人つて、実際にはいませんよね

「どうしてあのおとき助けしてくれなかったのですか!?!」

「いや、だって、伶俐さん、怖いですし……」

「私っ!孫なんですよね!」

「はい、可愛い可愛い孫ですよ」

「じゃあ、勇気をだして助けてくださいよ」

「敵討ちの準備はしていたんですが……」

「敵討ちなんてしてもらっても少しも嬉しくありませんよ!悲しむヒトが増えるだけです!」

「「悲しむヒトが増えるだけ」ですか、いいこと言いますねえ。感動しました。いつの間にかこんな良いセリフを言えるような子に育っていたんですね、おじいちゃんとしては嬉しいです」

「いやっ、いつの間にか、とか、会ってからまだ三日も経っていませんよ!」

「ああ、そうでしたね」

「とにかく、私は怒りました。もうおじいちゃんとは口を利いてあげません!」

「そ、そんなっ！」

「……………」

「あー、却花ちゃん？」

「……………」

「バーカバーカ！」

「……………」

「布団が吹っ飛んだ」

「……………」

「猫が寝転んだ」

「……………」

「隣の家に困いが出来たって、カツコイー！」

「……………」

「却花ちゃん、その服似合ってるね。孫にも衣装。てね！」

「……………」

「 飴ちゃん」

「……………（ぴくっ）」

「 飴ちゃん、あげるよっ…」

「……………（じゅるっ）」

「おじいちゃんのこと、許してくれるのなら飴ちゃんあげるんですけどね」

「……………」

「カウントダウンしますよ。五、四、三、二」

「いただきますー!」

「ふふふ、はい、どうぞ」

「（ぱくっ）……………あっ、しまった!」

「約束ですよ、我輩を許してください」

「 飴ちゃんて釣るなんて卑怯な。それが大人のすることですかっ!」

「約束は約束です。ふふふふ、大人はみんなずる賢いんですよ」

「くっ、仕方ありません。おじいちゃんを許します。しかし……………」

「しかし?」

「こんな子供を飴ちゃんて釣る大人とか、普通に考えれば不審者に

しか見えませんよね」

「え？」

「しかも自分のことを「おじいちゃん」とか呼ばせてるし。警察に通報されたら即、牢屋行きですね」

「……………」

「私も悲しいです。こんな変態っぽい老人に無理矢理孫にされちゃって」

「……………」

「しかもいざという時に助けてくれない。冷たいヒトに」

「……………」

「こんな老人についていこうと考えたあの時の自分を殴ってやりたいです」

「そ、そんな」

「それに……………ってええ！泣いてるんですか！」

「泣、いて、なん、か、いま、せん。グスッ」

「いや、泣いてるでしょう？」

「却花、ちゃん。儂みた、いな、のと、一緒に、いたく、ない、の

なら、言って、くだ、さいよ。今まで、ありが、とっ、ごぞい、
ました。さよ、ならっ」

「え、ちょっと、待ってください！言いすぎましたっ。謝りますか
らっ。……ああ、行っちゃった。追い掛けないと」

先入観ってのを完全に捨てられる人って、実際にはいませんよね（後書き）

悲しい時に素直に泣けるって、いいことですね。

小さき策士

「おじいちゃん！待ってよー！」

「一人にしないでよー、私、泣いちゃうよー！」

「うつつ、グスツ、ひくっ」

「却花ちゃん！どうして泣いているのですか？」

「だって、おじいちゃんが、私をおいて行くから」

「でも、却花ちゃんが、儂みたいなの孫にされて嫌だみたいなことを……………」

「グスツ、そ、そんな、こと、ない、もんっ」

「なら、あれは儂の聞き間違えだったのですね。すみません、お詫びに飴ちゃんあげます」

「わーい、ありがとう。(ぱくっ)……………ちよろいな」

「うん？何か言いましたか？」

「うん。飴ちゃん美味しいなって言いました」

「そうですね、それは何よりです」

「(ニヤッ)」

「何故そんなに笑っているのですか？」

「いや、飴ちゃんがあまりにも美味しくて、幸せだなぁって思いました」

「そうですね、却花ちゃんが幸せなら、それでいいです」

「……………クスッ」

小さき策士（後書き）

子供は、大人が思っている以上に賢いです。

特に、親の様子を窺う能力は、大人以上かもしれません。気をつけましょう。

嘘つきは泥棒の（中略）人間みんな、いずれは泥棒ですね（前書き）

動物は、親が受けたストレスを子が受け継ぐらしいですけど、親が万引きして恐ろしいめにあえば、万引きしない子が生まれてくるのでしょうか？

嘘つきは泥棒の（中略）人間みんな、いずれは泥棒ですね

「……………ふむ、却花ちゃん。僕が目を離していた隙に、何か無くなっていますか？」

「え？」

「たとえば、財布とか。入っているのはお金じゃなくて飴ちゃんですが」

「……………無いつ！私の飴ちゃんがつ！」

「やはりそうですか。この気配、百々目鬼、ですか」

「百々目鬼、って、何なんですか？」

「簡単に言うと、目がたくさん腕にある泥棒ですね。」

「なんか怖いですね。目がたくさんあるなんて」

「ふふふ、大丈夫です。百々目鬼には大きな弱点がありますからね。とにかく、あちらに逃げたようですので、追いましょー！」

「ここにいましたか、泥棒さん。その財布はこの子の物です。返しなさい」

「へっ、みふかつひゃか。ひはははない、ふはえ、ほほえきひーふ」

「おじいちゃん！このヒト私の飴ちゃん食べてる！」

「ふん、魔法、ですか。鬼族が魔法を使うなんて珍しい。お名前を教えてくださいませんか？」

「……………わはひほひっはすわわはひははいはほ。はあひひ、わはひほはまへはほしへらへなひば、ひるぼめひはらほひえへやほう。ひーぶ、は！」

「ふむふむ、ギルドでの名しか教えてくれませんか。シーフ、いかにも泥棒っぽい名前ですね。まさか、ギルドに登録した職業まで、泥棒なんじゃ、ないですよな？」

「ふん、ほのほーひま！ははひはめんはいははら、はぶすひすよふもはいのはっ！」

「ほう、それは素晴らしい自信です。その自信に免じて今回は見逃してあげます。しかし、次に、私の可愛い孫の持ち物に手を出したら、許しませんよ」

「ほー、ほーふるっへいふんら？」

「そのとき、貴女が私の孫になってくれない場合、捕まえて警察に

引き渡します。懸賞金、三千万ゴールドでしたね？」

「ほふひっへるは。ひゃはさひほり、おはへほはへをひひれほ
っ」

「ギルドでの名は、シルバ、です。本名は、貴女が教えてくれてか
ら言いつつとごしませしょう。では」

「ひゃーは…」

「はっ」

「…………おじいちゃん、色々聞きたいことがあるんだけど、まず、
あのヒトは一体何者なんですか？」

「泥棒のシーフちゃんです。飴ちゃんをたくさん頬張ってたからっ
まく喋れていませんでしたね」

「なんでおじいちゃんは聞き取れたの？」

「それは、年の功ってやつですよ」

「……………」

「なにか不満があるのですか？」

「はい、私の飴ちゃんが！」

「それは、却花ちゃんが財布をちゃんと見はってなかったからでしょう。この世界は却花ちゃんが思っているほど甘くありません。自分の身は自分で守らないといけませんよ」

「……………はい。ごめんなさい。次から気をつけます」

「よろしい、では、気を取り直して、買い物にでも行きましょうか。飴ちゃん専門店、好きな飴ちゃんを五百ゴールド分までなら買ってあげますよ」

「えっ……………はいっ！！」

嘘つきは泥棒の（中略）人間みんな、いずれは泥棒ですね（後書き）

結局、百々目鬼の弱点、『近くで玉葱を刻む』を使うことはありま
せんでした。残念。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8090x/>

銀の放浪老人

2011年11月10日07時07分発行